平成２８年２月２２日（月）

老球の細道２１３

読書のススメ考

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

戦国時代の歴史上の人物ビッグ３と平成の小者の性格を表す有名な歌がある。

「泣かぬなら　殺してしまえ　ホトトギス（織田信長）。泣かぬなら　泣かせてみせよう　ホトトギス（豊臣秀吉）。泣かぬなら　泣くまで待とう　ホトトギス（徳川家康）。泣かぬなら　代わりに泣こう　ホトトギス（室井冨仁）」

私はこのビッグ３の中では徳川家康が最も好きである。私に最も不足している「我慢強さ」を持っているからだ。せっかちでなく、すぐに結果が出なくとも待つことができる。

「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基。怒りを敵と思え。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば害其の身に至る。おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるに勝れり」

この言葉は４０年近く前に読んだ『家康入門』という本から知りえた、家康の有名な遺訓である。論語にある「任重くして道遠し」を参考にしたという。幼少の頃から我慢強さに欠けていた私は、授業や部活動の指導などで思い通りにいかなくなるとよくこの言葉を思い出して、自分をコントロールしたものである。

その後徳川家康を極めようと山岡荘八著『徳川家康』（講談社）単行本１８巻を購入した。読破にチャレンジしたが５巻で根負けして現在に至っている。愚妻は全巻を２回も読破し、家康の側室になったかのように、家康のことはなんでもござれとなってしまった。

先日ＮＨＫの『歴史ヒストリア』において、「徳川家康は無類の読書家であった」ということが放映されていた。ご存じのように、家康は天下統一までに数限りない修羅場を潜り抜けてきている。現代に生きる私たちがスポーツの世界で生きる修羅場とはレベルが違う。命がけの修羅場である。そのような修羅場を生き抜くために、家康が頼った知恵はどこから得たのか。それは古今東西の先人達が書いた本からだったという。

「桶狭間の戦い」においては戦況不利を打開するために「孫子の兵法」から学んだ。領国の殿様として領民を治めるためには「孔子の論語」を参考にした。また、豊臣秀頼に言いがかりをつけて大阪の陣を起こし、豊臣家を滅亡に導いたのは鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」を読んだからである。平清盛が幼き源頼朝、義経を殺さずにおいたことが、後に平氏が源氏にリベンジされてしまうきっかけを作ったことを知り、情に流されなかった。

このように殺戮を日常とした時代でも、成功するリーダーは読書から色々なことを学んでいた。現代も色々な分野のリーダーは読書家である。どうしてこのような人たちは本を読むのだろうか。それは自分を変えていきたい、自分をもっと成長させたい、自分のわからないところ、足りないところを補い、もっと向上したいと思うからだろう。

「読書の恩恵の最たるものは、夢を抱き続けることができることだった。自分の知らないこと、自分がやりたいこと、こんなに素晴らしい人がいることを教えてくれる。自分もそうなりたいと思う。ぜひやってみたいと思う」（ハイブロー武蔵著『読書力』）

目標のある人、夢のある人は読書をする 。忙しい毎日の日常の中に細切れでも良いから読書する時間を探したい。そして、「いつもそばには読みかけの本を」。